

## 第Ⅳ部

### 旧村保品・神野の歴史と民俗探訪

藤 由美

八千代市の北端、栗谷遺跡は、今は、東京成徳大学のキャンパスともえぎ野団地の住宅街となっていますが、かつては印旛沼に面する保品西端の舌状台地で、隣接する神野（かの）にも一部にかかる山林と谷津田でした。そしてこの遺跡の周囲には、保品と神野両地区の人々の昔からの暮らしをしのばせる史跡や民俗行事が今も残っています。旧村の風景を歩きながら、先史時代から印旛沼とともに生きた人々の生活や信仰の跡をたどってみたいと思います。（図1の「保品・神野の史跡地図」参照）

#### 1. 旧保品村のすがたと歴史

保品は、文和二年（1353）の「室町幕府御教書」にも「星名郷」としてその名が確認できる中世からの村である。郷内の「神村」（神野村）半分を押領されたとして下総守護千葉氏胤が訴人に下地を引き渡すよう命じる「星名郷内神村之半分事」の文書の記載から、中世のころ神村は星名郷の一部であったらしい。寛永二年（1625）の知行宛行状には「保科村」と書かれている。

保品の台地の周辺は、佐倉市先崎との境の内側に間谷が、神野村との境の内側には、境谷～栗谷・蔵谷～上谷の谷が深く入りこみ、この谷津田を生産基盤に古くからムラが営まれ、文政九年（1828）には、新田も合わせ村高417石余であった。（「年貢割付状」清宮家文書）

明治四年の「廃藩置県」により八千代市域は印旛県となり、行政区画として明治5年に府県の下に大区・小区を定め、米本村、下市場村、村上村、神野村、保品村の5か村をまとめて小区が作られ、戸長には保品の山崎右源太氏が任じられた。その戸長役場となった自宅長屋門に掲げられた看板が今も現存している。

集落は印旛沼に面する微高地を中心に、西から郷・南・須賀（すか）の三地区に分かれ、今も長屋門や蔵の残る旧家の屋敷が並んでいる。郷地区には村の産土として2年後ごとの祭礼が今も続いている香取神社が、南地区には村人の檀那寺として真言宗の東栄寺がある。

沼に突き出した須賀地区から対岸の印旛村の吉田へは、現在阿宗橋が架かっているが、大戦直後に駐屯していた旧軍工兵隊が木製の「捷範橋」を架けるまで、吉田村とは渡し舟による往来であった。今は、その渡船場の跡に、夜泣きに効くという地藏石像と水神社の石碑を納めたお堂が建っている。

#### 2. おおびた遺跡と少年自然の家

須賀地区には「おおびた遺跡」がある。「おおびた」とは「大辺田」のことで、上下2段の段丘のうち、下の広い第一段丘面をさす地名に由来する。（『八千代の遺跡』1983. 3 八千代市教育委員会発行では「おおべた遺跡」となっている）

1973年、市内でも自然環境に恵まれたこの背後の高台（第二段丘面）に、天文や自然観察の実習体験の場として「少年自然の家」の建設計画が建てられ、ここが遺跡\*1の一部であることから、村田一男（現郷土博物館長）を調査団長に、高校生や大学生、八千代市郷土歴史研究会の市民も参加して発

掘調査が行われた。（\*1常松「保品・神野の先史遺跡」参照）

検出された遺構は、楕円形の竪穴住居跡1軒と、大小の長方形の竪穴住居跡6軒、高床倉庫跡などで、楕円形の焼失住居址は床面出土の縄文・結節文施文の甕・小形壺の遺物（図2の実測図）から弥生後期、他の長方形住居群は、壺、甕、高杯、土玉などの遺物が五領・和泉の2期にわたることから古墳時代初期の継続した集落と判断される。そのほか有舌尖頭器を出土した縄文時代の土坑なども発見され、それらの遺物は少年自然の家の2階ロビーに今も展示されている。未調査の広い遺跡範囲には、土器片の散布する畑や、少年自然の家背後の斜面の植物観察園内に中世の城館遺構と思われる長方形土堤も残っており、縄文から歴史時代の生活の痕跡を想像しながら歩くのも興味深い。

またこの台地の東の先崎との間には、間谷の谷津田が入っていて、八千代パブリックゴルフ場から入ったその谷奥では、市民による野草保存と古代米栽培の試み\*2が行われ、谷津田に恵まれた保品の昔をしのばせる光景が今もみられる。（\*2酒井「保品周辺の自然について」参照）

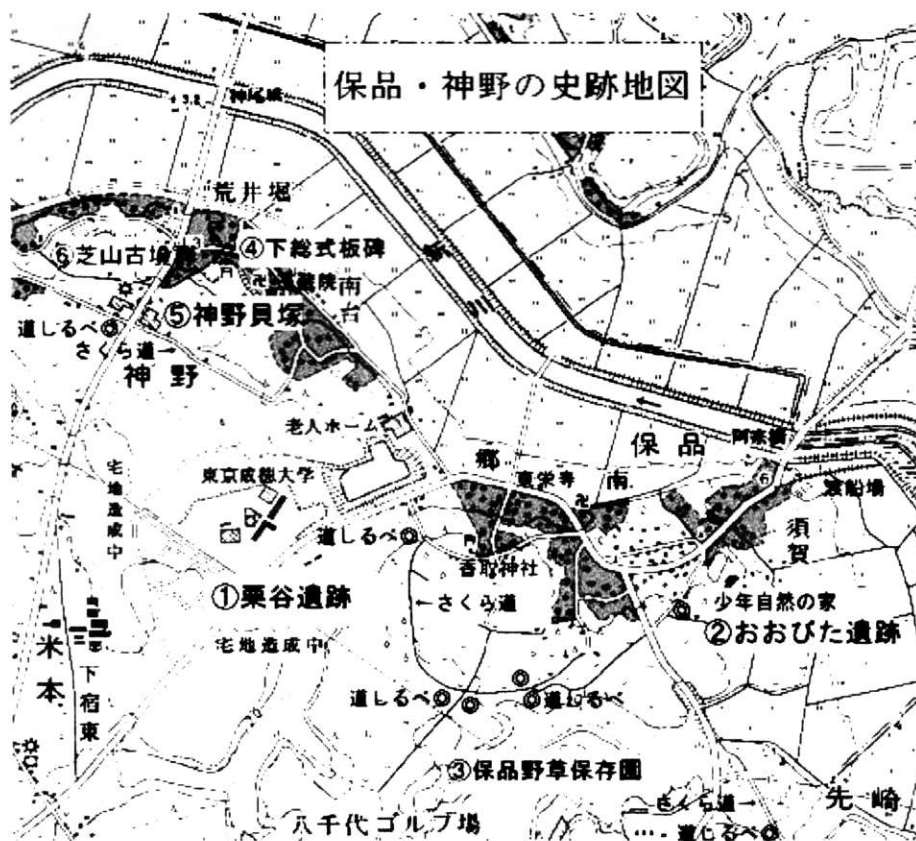
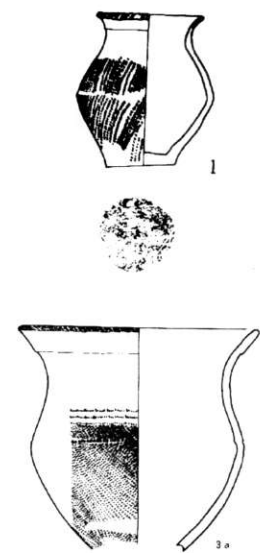


図1



おおびた遺跡第6号  
住居址出土土器

図2

### 3. 星笠山東栄寺と「香取の海」

保品の集落中央、印旛沼畔にある星笠山東栄寺は、総本山醍醐三宝院の末寺で真言宗新義派に属した由緒ある寺院である。1989年八千代市郷土歴史研究会と八千代市仏教連合会による「八千代八福神」設置に際し、福祿寿の石像が境内に祀られ、新春は八福神めぐりの参拝客でにぎわう。

本尊不動明王を祀る本堂の左には、2002年に改修された薬師堂が美しい姿を見せている。かつて萱

葺きだった薬師堂は、檀家の浄財により桧材で補修、屋根は銅板ぶきに改められた。また解体の際、屋根材から宝永四年（1707）常州河内郡の大工七人と木挽き四人が建てたとの墨書が見つかり、三百年に亘って「祈り込んで伝えてきた」（住職の落慶法要挨拶）薬師堂であることがわかった。

落慶法要の際拝観した薬師如来像は、頭髮が清涼寺式の縄目状の珍しい像容で、その左右の脇侍・十二神将が小ぶりながらも1体も欠けることなく堂内に並ぶ姿は実に壯観であった。また本堂脇陣にも損傷した江戸時代の清涼寺式の如来像があるという。

縄目状の頭髮など特徴ある像容の清涼寺式如来像は、中世前期、戒律を重視して仏教界を刷新しようとした西大寺流律宗の叡尊が特に尊崇した仏像である。保品から新川（平戸川）を遡った村上の正覚院にも千葉県指定有形文化財の清涼寺式釈迦如来像が現存しているが、正覚院の縁起では「頭は毘首竭摩作の釈迦像」で「本尊は保科村にありしを…入道真円と云う人当寺を建立し、うつして本尊とす…」と書かれ、保品から正覚院へこの釈迦像が来たと伝承されている。頭のみ毘首竭摩作という縁起譚は土浦市宍塚の般若寺にもあり、また叡尊の弟子忍性が、鎌倉の極楽寺からつくば市小田の三村山極楽寺を拠点に活動した霞ヶ浦周辺には、清涼寺式の仏像や律宗の儀軌による五輪塔などの石造物が数多く見られ、その布教の足跡がたどることができる。佐倉市にも印旛沼に面する寺院に頭部が縄目状の中世の仏像が3体現存し、これらや正覚院の釈迦像、保品の伝承などから「香取の海」につながる信仰の地域性が感じられる。

なお、現在の花見川と新川は、大和田排水機場を隔てて南と北に分かれているが、中世までは、鎌倉や金沢称名寺の港である六浦から東京湾を経て、千葉市側の花島観音の谷奥を遡り、横戸のわずかな分水界を越して印旛沼側の村上正覚院から「香取の海」へ抜ける交通が充分機能していたと考えられ、花島の十一面観音像の仏師賢光の作像が印旛沼北岸の印西市松崎の多門院、印旛村平賀の来福寺、そして市原市の長榮寺に伝世されていることから、鎌倉時代のこの文化圏の盛隆を類推することができる。

#### 4. 旧神野村のすがたと歴史

中世は星名郷の一部であった「神村」は、慶長七年（1603）の土屋家文書には「白井領内神ノ村水帳」とあり、寛延二年（1749）では佐倉藩領村高 141 石余と新田改高 6 石余であった。

神野の集落は、境谷と栗谷西側の半円形の台地の裾に展開している。八千代カルチャータウンは保品側の上谷と栗谷を中心とした開発であるが、栗谷を囲んで神野側の台地である境堀・向境・雷（らい）・役山東にもおよぶ。

神野はゴーチとよばれるムラの共有地でもある「新山」を中心に、そのほとんどが台地で、上から山林・畑、その下に人家が連なり、保品と違って谷津田は少なく、水田は印旛沼に向かってひろがっている。かつては、神野も保品も台地の縁に近いほうから本田（ホンデン）と島畑（シマツパタ）、ドブツ田、ヤラート（野原）とに分かれていて、神野では本田の広がる地域を「九十九割り」と呼んでいた。（33軒の旧家が各3反ずつ所有していたことに由来するという。）

1922年に安食の水門が完成しても、谷津田以外は冠水被害が頻繁で、そのリスクを少なくするため

本田の中に土盛りをした島畑で麦などを作っていたこともあった。また印旛沼での漁業も重要な副業で、特に冬のヌカエビ曳きは、洪水で稲が全滅しても喰いつなぐだけの収入が得られたという。

戦後、洪水時に沼の水を東京湾に排水する印旛沼疎水路の工事が着手され、1956年からは神野の地先の平戸からの「新川」と、排水改善のための中央排水路、土地改良の工事も本格化、1966年大和田排水機場が稼動し、1968年水資源開発公団による「印旛沼開発事業」が完成した。かくして、カンジキで作業したドブツ田やマコモや葦の草刈場であったヤラートは姿を消し、印旛沼干拓地は冠水の心配のない大規模な田園地帯となった。今は新川（印旛沼疎水路）沿いに祀られた水神宮が、人知も及ばぬ自然の脅威と恵みを受けて印旛沼と暮らした人々の祈りの年月を現代に伝えている。

## 5. 神野の寺社と祭り

ムラの中は「昔、郷と新田に分かれていた」とのことで、玉蔵院の右隣より東側が「新田」、西側が「郷」であった。玉位山玉蔵院は真言宗豊山派で神野村全員が檀家である。現在無住で保品の東栄寺の住職が管理している。開基開山は不詳だが、三百年以上の歳月に損傷はなはだしい本堂を、寺の持山 883 坪をカルチャータウン開発用に大成建設に売却した資金で建替え、昭和 49 年落慶法要したとの記念碑文が門柱に刻まれている。

新田側には、玉蔵院の左隣の崖上にムラの氏神である熊野神社、保品側の境には以前ヒノミヤ（姫の宮）があった。郷には、台地上に子之神神社、石神様、熊野分社、そして新川のほとりに水神様が祀られている。

熊野神社の 5 年毎の祭礼は、10 月 9 日前後 3 日間のオオマチ（本祭り）と、かつては 9 月 24 日のコマチがあった。本祭りでは、神輿の渡御は熊野神社から水神宮へ「浜降り」に行き、保品の境のへ往復、芝山みちを通過して熊野分社から平戸口まで行き、ムラミチを通過して神社へと還御する。

また毎年 2 月 1 日には熊野神社のオビシヤが、2 月初午の日にマタカ神社のマビシヤが行われる。オビシヤは当年度と次年度と一昨年の各当番 3 軒ずつと部落長の 10 名により、神棚に上げられたオビシヤの包みを宴会時に次の当番に渡し、新しい当番は背中に子供を負うようにして自宅に持ち帰り、迎えの宴会を開く。

子之神神社は、手水鉢の記年銘から天保年間には存在していたようであるが、大正期になって縁結び・安産の神として子之神講が組織され、急に盛んになった神社である。供えてある打出の小槌は願をかけて叶ったら倍にして奉納する。

その先にある小さな森は石神様で、ご神体は大きな石棒。祠の周りにも縄文時代に遡る石皿や、たき石や磨り石が集められてある。ここからは縄文土器片も多量に散布する神野貝塚\*1の畑が広がっている。（\*1常松「保品・神野の先史遺跡」参照）

## 6. 神野の下総式板碑「オビク様の石」

玉蔵院境内に、八千代市指定文化財になっている市内最大の下総式板碑がある。表面はひどく損傷しているが、下部の百名ほどの戒名のほか、上部中央に菱形の涅槃点が残っているので、おそらく胎

蔵界大日如来の梵字アーンクと蓮台などが彫刻されていたと思われる。石材は筑波産の黒雲母片岩で、本シンポジウム実行委員会結成時のフィールドワークの際、大塚初重先生に見ていただいたご感想では、古墳の箱式石棺の蓋石を再利用した可能性があるとのことであった。そのほか神野では、武蔵式板碑が裏山や墓地から 23 基見つかり、全てアーンクが彫刻されている。

鎌倉時代中頃から室町時代にかけて造立された板碑には、武蔵式板碑と下総式板碑がある。加工しやすい秩父産緑泥片岩を用いた小型の武蔵式板碑は、関東～甲信越地方に広く分布するが、黒雲母片岩の大型の下総式板碑は、手賀沼畔の船戸古墳群協の「阿弥陀様板碑」のほかこの神野も含め、北総の西部では極めて少なく、そのほとんどが香取郡を中心に下総東部に分布している。この地域では、銚子や飯岡山の砂岩と筑波産の黒雲母片岩を組み合わせた箱式石棺という埋葬施設が用いられ、その分布地域と下総式板碑の分布地域とが重なることから、古代からの「香取の海」を通じた交通文化圏が推察される興味深い石造物である。

なお、民俗調査によれば、神野の下総式板碑は「オビク様の石」と呼ばれて、もと新山の森の中のビクニン塚にあり、明治年間に熊野神社へ、そして玉蔵院改築に際して現在の場所に移された。そしてこのオビク様はもと皇族のお姫様が流れ落ちて住んだところと伝えられ、コモリ堂も建てられていて、縁日ではおこもりするお年寄りでにぎわったとのことである。

## 7. 神野から保品へ、道標が示す「もうひとつのさくら道」

神野と保品の路傍には多数の石仏・石造文化財が残されている。近世末から近代の道しるべを兼ねた石造物も多く、その銘文データなどを足で調べて、今は廃れてしまいつつある古道を復元しようという試みが八千代市郷土歴史研究会によって行われてきた。

調査で明らかになったこの古道は、一名「佐倉街道」「往還ドオリ」ともよばれた平戸橋から神野・保品を経て臼井宿へ通じる道で、八千代市郷土歴史研究会ではこの道を、成田街道（296 号線）に対して「もうひとつのさくら道」とネーミングし、歴史散歩のフィールドとして紹介している。

神野の西端、平戸の水難供養碑からスタートしたこの「さくら道」は、「右保品臼井道・左かの村」と記された「足尾山宮」供養塔に導かれて、平戸前の熊野分社前から、芝山古墳群の横を通り、千葉龍ヶ崎線との交差する神野坂上の石塔群中の十九夜塔の「東保品佐倉」の道しるべをたよりに直線で神野の台地を横断する。

途中、新山の馬頭観音群から保品へ続く旧道は、現在畑の先でカルチャータウン建設に伴う調整池設置のため、いったん途切れてしまうが、(かろうじて歩けるので、) 東京成徳大学と調整池のフェンスとの間を通して県道八千代・宗像線に出る。大成建設の現場事務所協の道を登り、右折して「東佐倉 南米本 北平戸」と刻まれた庚申塔に導かれて先を行くと、今も昔ながらの道が半弧を描くように、「玉や」の花火工場のある台地の中央を通り、間谷を抜けて先崎へ続く。その道沿いには、神野で 2 基、また保品だけで 7 基の道標が残っており、さらに少年自然の家入り口の「北吉田渡船場」を示す枝道の道標を入れると、計 11 基の道標が残されている。

これらの道標は、文化九年（1812）銘の二十三夜塔が一番古く、続いて嘉永年間（1848～1854）



の馬頭観音塔であるが、そのほかは明治以降で、最新は「昭和十二年」の子安講の文字碑となっている。また道標に刻まれた地名は、隣村名と渡船場のほかでは、佐倉が多く、他に船橋・木下・大森などが見られる。その造立の背景には、経済活動や寺社参詣のための庶民の交通がいつそう活発になったことと、さらに近世の講を中心とした信仰活動が近代でも盛んでありつつも、信心による供養塔に実用的な道標機能を兼ね備えることが、近代的で合理的な意味を持つと思われたからであろう。今もそれぞれの分岐点に建つ道標は、里や辺田道を通らず、寂しい裏山の畑や山林の道を行く人々を励ましているように思える。

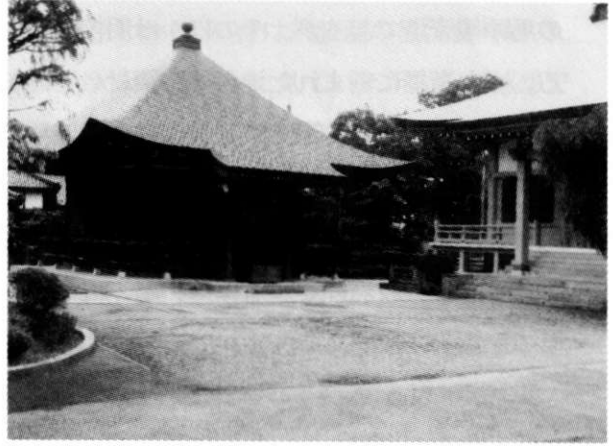
八千代市の中でもその北端に位置し、京成線や成田街道に遠く、環境がよく保たれていることから自然観察の宝庫ともされてきた保品・神野地区であるが、印旛沼対岸の北総鉄道の開通で県道が整備されて車の交通量が増え、また両地区間の栗谷を中心とする台地全面の開発が八千代カルチャータウン開発事業として行われ、その姿は、1988年に八千代市郷土歴史研究会の先輩たちが「もうひとつのさくら道」を調査したころとは一変している。とはいえ、里道を歩くと今も伝統的な雛人形を製作している工房があったり、台地の畑が一面の貝塚遺跡だったり、谷津を遡ると在来野草保存に取り組んでいる市民グループの野草保存園があったり、まだまだフィールドワークとして地域を歩くことの楽しみのつきぬエリアである。栗谷遺跡の出土土器と同様に、この遺跡の立地と景観、そしてその地域の歴史にも関心を向けていただけたらと思ひ、この一稿を加えさせていただいた。

#### 参考文献

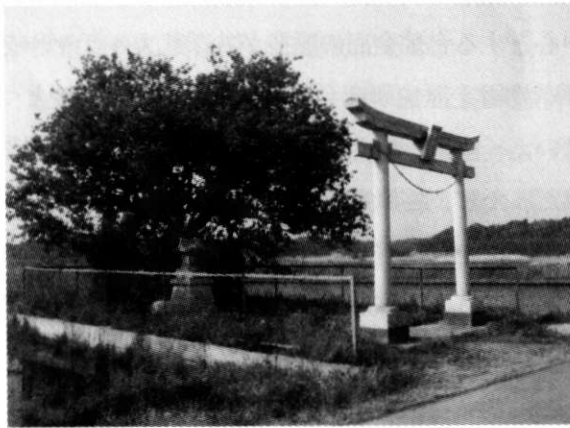
1. 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』1991 八千代市史編さん委員会
2. 『八千代市の歴史 資料編 民俗』1993 八千代市史編さん委員会
3. 『日本歴史地名大系 12 千葉県地名』郷土歴史大事典 1996 平凡社
4. 『おおびた遺跡 —八千代市少年自然の家建設地内遺跡—』1975 おおびた遺跡調査団 八千代市教育委員会
5. 『在来野草保存運動活動 10年の歩み』2005 八千代自然と環境を考える会
6. 「保品・東栄寺の薬師堂の落慶法要と新史料紹介」藤由美 『郷土史研通信』2002 第39号 八千代市郷土歴史研究会
7. 「八千代の八福神 8 東栄寺(保品)」横井和子 『史談八千代』1989 第14号 八千代市郷土歴史研究会
8. 『千葉県八千代市 神野の民俗』1976 八千代市教育委員会
9. 「八千代の歴史散歩道 旧神野村を歩く」牧野光男 『史談八千代』1997 第22号
10. 「神野貝塚の基礎的研究」常松成人ほか 『貝塚研究』1997 第2号 園生貝塚研究会
11. 「さくら道—もう一つのさくら道を探して」横井・原・鈴木 『史談八千代』1988 第13号
12. 「もうひとつの佐倉道 小池から臼井へ」園田充一 『ふるさと再発見 八千代の道しるべ』2001 八千代市郷土歴史研究会



保品野草保存園の谷津田（間谷）



星莖山東栄寺



神野の水神宮



保品の梨畑三叉路の道標



神野の下総式板碑

大塚初重実行委員長と  
神野貝塚を歩く 2006.4.16

